

ベートーヴェン：交響曲第6番へ長調 Op.68「田園」

1800年代の初めに、ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン（1770-1827）は難聴の兆しに絶望し、有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」をしたためた。だがこの「遺書」は、自分が生きる道はもう芸術しかないという、ベートーヴェンの新たな決意の表明でもあった。現に、それ以降ますます創作意欲は高まり、「傑作の森」と呼ばれる時代がやってくる。苦悩のどん底から這い上がったとき、人は運命の克服を自ら讃え、自然の安らぎに感謝を捧げることだろう。交響曲第5、6番は、そうして生まれた。どちらも1808年12月22日、アン・デア・ウィーン劇場で、ベートーヴェン自身の指揮で初演されている。

交響曲第6番「田園」は、ベートーヴェン自身が標題を付けた唯一の交響曲でもある。初演時の楽譜に「田園交響曲、あるいは田舎の生活の思い出。音画というよりも感情の表現」と記されていたことから、自然の描写そのものが目的ではなく、自然が呼び起こす感情を表現したかったとみえる。自然の情景の中でくつろぐ第1～3楽章から、第4楽章の嵐を経て、第5楽章でふたたび安らぎが戻ってくるとき、音楽は自然への深い喜びと感謝の念に包まれる。いわば「田園」は感情をめぐるひとつの物語であり、ベルリオーズの「幻想交響曲」をはじめとするロマン派の標題音楽の先駆けとなった。

音楽の内部に目を向けると、ベートーヴェンは第5番「運命」で進めた手法、すなわち動機（主題を構成する要素）の徹底活用をさらに推し進めている。たとえば、第1楽章冒頭の朗らかな第1主題の動機（「ラ・トシ・レ・ド」や「ド・トシラ・ソ・ド」）が、それぞれ独立してジグソーパズルのピースのように楽章全体に組み込まれている。つまり、純粹に音だけでも、しっかり構築された音楽なのである。また、5楽章という楽章構成（通常は4楽章）や、第3～5楽章が切れ目なく続くことも、当時としては型破りであった。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo、へ長調「田舎に着いた時の晴れ晴れとした気分の目覚め」：楽章冒頭、第1主題がフェルマータで休止するのは、「運命」の冒頭と共通している。綿密に計算された構成にも関わらず、音楽はのびのびとしている。

第2楽章 アンダンテ・モルト・モート、変ロ長調「小川のほとりの情景」：水の流れやそよ風、小鳥たちのさえずりが安らぎをもたらす。

第3楽章 アレグロ、へ長調「田舎の人々の楽しい集い」：スケルツォ風の速い3拍子の音楽。この楽章の中間部でトランペットが初めて登場する。

第4楽章 アレグロ、へ短調「雷雨、嵐」：ここからピッコロ、トロンボーン2、ティンパニが加わり、悪天候を描写する。

第5楽章 アレグレット、へ長調「羊飼いの歌。嵐の後の喜ばしく感謝に満ちた気持ち」：冒頭のクラリネット、ホルンによるアルペンホルン風の響きがそのまま弦の主題へとつながる。喜びと感謝がじわじわと高まり、安らぎの中で音楽は幕を閉じる。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

<楽器編成>

ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、弦五部

※スコア上の表記